新年のごあいさつ

「複合危機」（poly-crisis）の時代によせて

市橋　克哉
（東海自治体問題研究所理事長）

新年、あけましておめでとうございます。

みなさんにとって2022年はどんな年でしたでしょうか。

３年経っても収束せず高齢者を中心に犠牲者を出し続けるCOVID-19のパンデミック、民間人を含むたくさんの犠牲者を生んでいるウクライナにおける悲惨な戦争、地球規模のエネルギー危機と物価の高騰、そして、戦争に乗じた安全保障政策の大転換、さらには、気候変動による未曽有の洪水、干ばつ、山火事等の大災害による人々の犠牲・・・などなど、新春にもかかわらず「縁起のいい話題」でなくて申し訳ないのですが、昨年の出来事を思い出すとき、みなさんも、「暗い話題」であれば次々とあげることができるでしょう。

かつて一世代に一つ、二つと単発で生じた変化、あるいは、想像さえしなかった変化が、この1年で「複合危機」となり加速度的な速さと幾何級数的な増大を伴って起こっています。同時多発する「複合危機」（poly-crisis）の時代に入ったとみる人は、わたしだけではないでしょう。さらに、「複合危機」となっていくつもの危機が同時進行するプロセスをみるとき、そこには、「コリンズ辞書」（Collins Dictionary）が「2022 年のことば」に選んだ「永続する危機（permacrisis）」へと、「複合危機」が転化する傾向もみてとれます。

前例のない危機は、別の危機へと飛び火し、さらに、次の危機へと飛び火する、永続する危機の全体は、部分の危機よりもはるかに危険で、この先にどんな未知の危機が待ち受けているかは、想像するだけで戦慄が走ります。「複合危機」には、このように「永続する危機」へと転化する「収斂する作用」、「連鎖する作用」さらには「誘発する作用」があります。

このような「複合危機」に対して、岸田政権が行っている危機対応のように、その複合的な多様な影響から学ばない短絡的で反射的で一元的な危機対応は最悪でしょう。多様な社会を袋小路にますます閉じ込めてしまい、危機脱出の多用な出口を塞ぐことになります。「永続的な危機」に転化する「複合危機」への対応としては、多様な社会に備わった潜在力である危機からの回復力と持続力を強化することをめざすものでなければ、その克服につなげることはできないのです。

集権型の危機対応ではなく、分権型の危機対応、すなわち、地方自治を中心とする社会の「多中心型のガバナンス　（polycentric governance）」を、わたしたちの創意工夫で探求することが求められています。ここに活路をみいだすのは、地域特性等の特殊な状況に合わせた多様な諸制度、補完性による民主的プロセスなど、危機克服の豊富な可能性をもっているからです。この探究は、あらゆる危機の深化が両義的であるように、「複合危機」が提供するチャンスをつかむことで、これまでにない変革へとつながるでしょう。